

# 日本人と韓国人の言語行動における「ウチ、ソト、ヨソ」と「우리 (ウリ)、남 (ナム)」

— 主に敬語行動を例に —

巖 廷 美

## 1. はじめに

我々は言語使用に際して、文法や発音など言語内部の特徴のみならず、言語外の要素である話し手としての自らの出身地、性別、職業、役割などの属性や上下、親疎などの聞き手との関係など、様々なサブ・カテゴリーを認知し言語選択を行っている。このような総合的なコンテキストと言語選択がその言語文化・社会構造と適切に符合したときに初めて円滑なコミュニケーションが行われるのである。言語選択のコンテキスト情報のカテゴリー認知の中で、もっとも根源的に人間の認知世界を拘束するのは、それぞれの言語社会、文化の背景にある社会文化的プロトタイプであると言えよう。例えば、日本語と韓国語の敬語使用において同一な内容を言う場合でも次の例文のように表現の仕方は異なる。次の例文は親の留守中にかかってきた電話口の相手に対して使われる表現である。

日本語

A：お父様はいらっしゃいますか。

B：いま父はおりません。

韓国語

A：아버님 계십니까? (お父様はいらっしゃいますか)

B：지금 아버님은 안 계시는데요. (今お父様はいらっしゃいませんが)

世界の言語の中でもっとも類似性の大きい言語であると言われている日本語と韓国語において、なぜこのような大きな違いが見られるのであろうか。本稿では、まず、日本人と韓国人の認知行動を支配する文化・社会的思考パターンを探り、その思考パターンに基づいて、日韓の敬語行動の相違点について説明を試みたい。これらの考察は日本語教育や韓国語教育の現場で実践的に活用し得る有効な資料を提供するであろう。

## 2. 日本人の「ウチ、ソト、ヨソ」の認知

「ウチ・ソト」の概念は日本社会の人間関係や言語行動などを支配する思考パターンの一つとして文化人類学や心理学などの領域で盛んに研究されてきた（平林・浜 1988、Bachnik, J 1990）。これらの研究では、自己を中心とする他者との人間関係を規定する際、「ウチ」の人間は「家族や自分の会社の人、自分の属するグループなどのごく親しい人々」で、「ソト」の人間は「親しくない人、他人、他の会社やグループの人など」と定義している。これに対して、三宅（1994）は「ウチ・ソト」の区別にさらに「ヨソ」の概念を加え、「ウチ・ソト・ヨソ」を日本人の認知構造や思考パターン、言語行動などを左右する枠組みとして提唱している。本稿では、これまでの枠組みより詳細な区別を行っている三宅（1994）の「ウチ・ソト・ヨソ」の枠組みを採用する。図1は、従来の「ウチ・ソト」、図2は三宅による「ウチ・ソト・ヨソ」の認知パターンを図式化したものである。

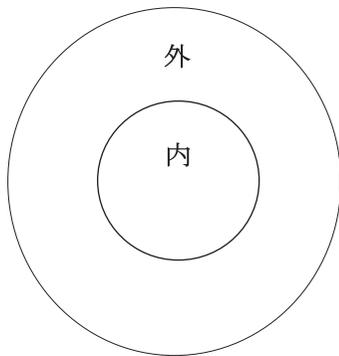


図1 日本の「内、外」  
(三宅 1994より)

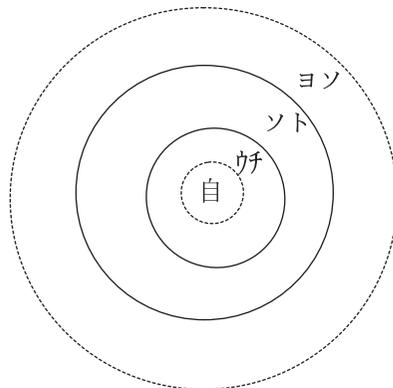


図2 日本の「ウチ、ソト、ヨソ」  
(三宅 1994より)

図1の「ウチ・ソト」では、主に血縁関係を中心とする家族や親戚関係またはごく親しい友人や同じ組織やグループの人々を「ウチ」の人間関係とし、そのほかの人間はすべて「ソト」の人間関係として二分化した認知構造になっている。しかし、「ソト」の人間関係として捉えられている「ウチ」以外の「他人」をすべて「ソト」の概念として捉えることができるであろうか。「他人」といっても「取引先の会社の人間や子供の学校の先生などあまり親しくはないが自己と関わりのある人間」と「道の通行人や電車などたまたま同じ空間にいる人、サービス業の人など、自己と「ウチ」とは関係がないか又は何かのきっかけで関わりを持ち得る他人」とを同じ範疇に入れるのは、対人関係における親疎関係を考える際に有効とは言えない。そこで、図2のように、「ソト」のグループを「ウチ」に関連のあるグループと関連のないグループに分け、前者を「ソト」、後者を「ヨソ」の概念と

して分けて考えている (三宅 1994)。

そして自己と「ウチ」の関係は点線で示されているように境界がはっきりしておらず、自己と「ウチ」を同一に捉えることも可能である。「ウチ」とその外円の「ソト」の間には実線で区切られているが、それは言語行動などの人間関係においてその差がはっきりあらわれる区別である。三宅 (1994) によると「ウチ」と「ソト」の「境界は状況によって収縮する。例えば、会社の上司のように、直接話すときは高い丁寧度の言語表現を使う相手でも、外部の人間に対してはウチの人間として謙譲語を使う対象となる」としている。また、「ソト」と「ヨソ」の間にも実線で明確に区切られているが、日本人は自己と関わりのない「ヨソ」の人間に対しては「ソト」の人間とははっきりと違う態度をとる。三宅は日本人の「ヨソ」の人に対する態度について「日本人は極めて冷淡で気配りのない行動をとることも多い。例えば、取引先の人間には丁寧で気配りを尽くす社員が仕事を終って電車に乗ると、高いびきをかいて回りに迷惑をかけたり、鼻くそを平気で取り続ける不躰さは、このようなヨソ意識からくるものであろう。」と述べている。このように、「ヨソ」とは日本語の「よそ者に用はない」という表現にもあるように、自己とは関連性の極めて低い世界であり、気を使う必要のない気楽な世界なのである。しかし、「相手の情報が多くなり、自分と関連ができると、この境界線も収縮してヨソの人間はソトへと繰り込まれる (三宅 1994)」としている。また、任・井出 (2004) は「ヨソ」について、「よそ様の前で恥ずかしい」といった使われ方にも反映されるように、自分と社会的に何らかの接点が生じた場合は、自分の行動を監視する規範としての「世間」という目になりうるのだ」と説明している。

従来の「ウチ、ソト、ヨソ」についての考察をまとめると、「ウチ」、「ソト」、「ヨソ」の間の境界がはっきりと区別されていて、「ウチ」の人間同士では言語行動においても丁寧な言葉遣いをしなくてもよい気楽で親密な付き合いをしているが、他の「ソト」、「ヨソ」の人間に対しては、敬語を使うなど「ウチ」とは異なる待遇行動をとらなければならないことが分かる。特に「ソト」の人に対する気配りや言葉遣いを間違えるとその人の評価をも下げってしまうことになり兼ねないのである。一見気楽に見える層である「ヨソ」も「世間」として自己の言動を監視する存在になり得るのである。結局、「ウチ」の中でだけ自己の表現や主張など言動が制限されないリラックスした人間関係が成立するのも知れない。

### 3. 韓国人の「우리 (ウリ)、남 (ナム)」の認知

韓国では「ウリ、ナム」の概念がある。本項では、日本の「ウチ、ソト、ヨソ」の概念と比較し得るものとして、韓国の「우리 (ウリ)」、「남 (ナム)」の認知構造について見てみる。まず、「우리 (ウリ)」と「남 (ナム)」の意味について知っておこう。

韓国の 국립국어연구원 (国立国語研究院) で刊行された 표준국어대사전 2008 (標準国語大辞典) によると、「우리 (ウリ)」の意味は「말하는 이가 자기와 듣는 이, 또는 자기와 듣는 이를 포함한 여러 사람을 가리키는 일인칭 대명사 (話す人が自分と聞く人、又は自分と聞く人を含むいろいろな人々を指し示す一人称代名詞)」である。「남 (ナム)」の意味は、「자기 이외의 다른 사람, 아무런 관계가 없거나 관계를 끊은 사람 (自分以外の人、何の関係もないかまたは関係を断ち切った人)」である。

つまり、「우리 (ウリ)」は一人称代名詞の「나 (私)」の複数形で、「나 (私)」を拡大したグループであると言える。「남 (ナム)」は「나」や「우리 (ウリ)」とは関連のない他人のことを意味する。

「우리 (ウリ)」と「남 (ナム)」という韓国人の人間関係や言語行動の軸になる枠組みは韓国でより日本の研究者に注目され、いくつかの研究報告 (小倉 1998、小針 1999、任・井出 2004) がある。しかし、何れの研究も日本語教育や韓国語教育の言語教育の分野で実践的に活用できるような対照研究にまではなっていないような感は否めない<sup>1)</sup>。日本の「ウチ、ソト、ヨソ」のカテゴリーと対比できる枠組みを提示した上、日本人と韓国人の認知構造の類似点や相違点についてより分析的な研究がなされる必要があろうと考える。

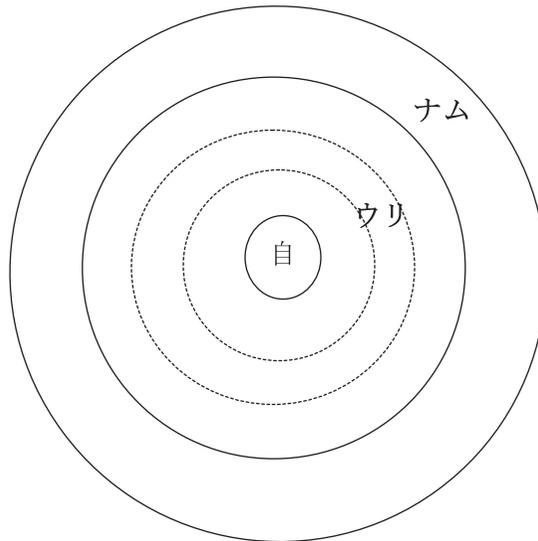


図3 韓国の「ウリ、ナム」

図3は「ウリ、ナム」<sup>2)</sup>の認知構造を図式化したものである。まず、中心の自己は日本

1) 小倉 (1988) と小針 (1999) は、「ウリ」と「ナム」の概念については説明しているが日本のモデルとの対照にはなっていない。また、任・井出 (2004) は、「ウリ」、「ナム」について日本語のモデルと比較的な視点からの説明がなされており、筆者自身も少なからずの示唆を受けた。しかし、「ウリ、ナム」の枠組みによる韓国語の敬語の説明にはなっていないと思う。

2) 以下からは「우리 (ウリ)、남 (ナム)」を「ウリ、ナム」に表記する。

の場合と違ってその回りの「ウリ」と境界が実線で区切られている。これは自分を「ウリ」の共同体の中に位置づけながらも独立した自己の意識が確立していることを意味している。日本人と韓国人の行動パターンの違いについて、Kumon (1980) は、水の分子を酸素と水素のあり方に例え次のように説明している。

「the Koreans remain as molecules of oxygen and hydrogen without undergoing a chemical change into water. Some of them might be transformed into water, but the majority of them remain as independent and separable molecules. (中略) further uses the oxygen-hydrogen example to identify a unique behavioral patterns of the Japanese. In this case, he identifies water alone, and it is a meaningless effort to trace molecules of oxygen and hydrogen in water. There are no separate and independent molecules of oxygen and hydrogen」

このように、韓国人は「ウリ」の共同体の中にもながらも独立した自己意識を持って「ウリ」のグループの人と関わっていると言えよう。

自己の周りの「ウリ」は日本人の「ウチ」の層と異なり、自己が属している家族を始めとする血縁、地縁や学縁の知人、同じ趣味の同好会など様々な共同体の集合として成り立っている。図3で「ウリ」の中にいくつかの複数の点線を表示しているのはこのような多様な「ウリ」の中の共同体を同心円状にあらわしている。周知の通り、韓国社会は儒教の思想が人々の考え方や生活様式などに深く影響を与えており、人間関係を考える際も、儒教のもっとも基本思想である生命の循環の「孝」を基本思想とし家族関係が確立され、その上に多様な社会関係を作り、さらには国家と国民の関係、それがさらに宇宙論までに拡大していくのである<sup>3)</sup>。つまり、「ウリ」の層は日本の「ウチ」よりはるかに広い共同体である。「ウリ」の中の人々には、主に年齢や社会的な上位関係による礼儀や伝統的拘束力を持つルール、倫理道徳が厳格に守られ、お互いに気を使いながら礼をもって接している。例え、家族の間でも、親子や兄弟の間にはきちんとした上下のルールが存在し、それを破ることは一般に許されないのである。

しかし、「ウリ」の外円の「ナム」の間にはこうした拘束力は存在しないと言っても過言ではない。お互いに気を使う必要なく気楽な関係を保てるのである。日本のように、「ヨソ」の存在が「世間」として自己を拘束する力としては働くことはほとんどないと言ってよいだろう。日本人が韓国に旅行に行くと「韓国は活気があって気楽だ」とか「親しくなるととても親切で人情味があるが、公衆道徳をあまり守らないなど公の場ではマナーがない人もいる」など相反する印象を持つこともあるが<sup>4)</sup>、これは「ウリ」のルールが厳しい代わりに、「ナム」のルールがゆるいため、旅行客のように外部の人間の視点から見ると

3) 加地伸行 (2000) 『儒教とは何か』を参照。

4) 小針進 (1999) 『韓国と韓国人隣人たちのほんとうの話』186ページ～192ページを参照。

そのように見えてしまうのであろう。

ところが、「ウリ」と「ナム」ははっきり区切られているが、何かのきっかけで一旦関わりを持つようになると、「ナム」の人間が「ウリ」の人間として受け入れられるのである。「ナム」の層の人間を「ウリ」に引き込む傾向も強く、少し親しくなると相手を「언니/오빠（話者が女の場合の姉/兄のことをさす親族名称）」、「누나/형（話者が男の場合の姉/兄のことをさす親族名称）」など、親族名称で呼び合うことは一般的なことである。また、初めて会う他人のことを「이모/삼촌（親族名称のおばさん/おじさんの意）」、「어머님/아버님（お母さん/お父さんの意）」などの親族名称で呼ぶこともよくあることである。

#### 4. 「ウチ、ソト、ヨソ」認知の日・韓比較

本項では、韓国人の認知構造を日本と同じく「ウチ、ソト、ヨソ」の枠組みで比較してみたい。そうすることによって、お互いの認知構造の特徴をより分かりやすく捉えることができるであろう。

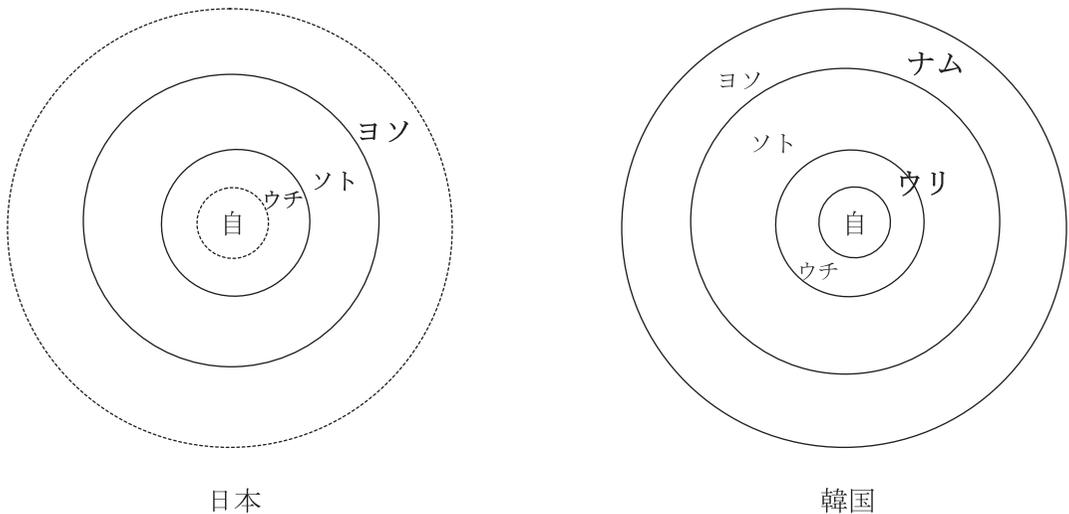


図4 日韓の「ウチ、ソト、ヨソ」

図4で見るように、大まかに日本の「ウチ」と「ソト」の層を合わせたものが「ウリ」の層となり、「ヨソ」が「ナム」の層になる。井出（1992）は「ウチ」と「ソト」を日本人の文化カテゴリーとし、「日本人は相手との関係で自分を規定し、それに応じた行動をすることを重視している。相手との人間関係の規定の仕方に、ウチ・ソトという二つのカテゴリーに分けるパターンがあり、その二つの領域をわきまえて行動することが一つの社会的ルールである。」と述べ、「ウチ」と「ソト」の使い分けが相手との人間関係においてもっとも基本的なルールであり、言語使用、特に敬語使用の基準になっていると強調して

いる。すなわち、日本人の行動の起点は個人ではなく「ウチ」というカテゴリーの認知の中で自分を把握し、それが行動やコミュニケーションの基本軸となつて、その下位にさらに細かいいくつかのサブ・カテゴリーのルールに従って行動していると言えよう。

一方、韓国人の場合は日本人のような「ウチ、ソト」意識は持っておらず、「ウリ」の人間関係の中で自己と相手との関係によって行動やコミュニケーションのパターンが定まるのである。例えば、日本では聞き手が話し手より目上で上位者であっても、「ウチ」の関係にあるものに対しては丁寧語を使わないなど、内輪の関係として気楽に接する。これは自分より目上で上位者であるということより、「ウチ」と「ソト」のカテゴリーによる認知のほうに先に働くからである。しかし、韓国では、「ウチ・ソト」の概念はなく、家族の間でも親や年の離れた兄弟に対しては尊敬語や丁寧語を使うなど、目上として礼を持って接しなければならないのである。

日本の「ヨソ」と韓国の「ナム」の間には大きな違いはない。日本では「ヨソには用がない」、韓国では「남이야 뭘 하든 말든 (人が何をしようが自分とは関係がない)」と言うことばがあるように、両方とも「ヨソ」と「ナム」の関係にある人に対しては自分とは関わりのない気楽な関係として捉えているのである。ただし、日本と韓国で異なる点は、韓国のほうは「ナム」の関係にある人の層が図4で見ると日本ほど厚くなく、何かのきっかけで容易に「ウリ」の関係の中に入れられる可能性が高いということである。言い換えれば、日本はそれぞれの層の間の境界がはっきりしているが、韓国の場合はその境界はゆるく「ウリ」と「ナム」の人間関係の相互移動は可能である。「ナム」の人間が「ウリ」の層に引き込まれることもあれば、逆に「ウリ」の人が「ウリ」の中のルールや倫理規範を破り続けることによって、「ナム」の層に追い出されることもあり得るのである。

## 5. 日韓の敬語と「ウチ・ソト・ヨソ」、「ウリ・ナム」の認知

この項では日本語と韓国語の敬語行動と認知構造との関係について考察する。まず、日本語と韓国語の敬語について概観しておく。

### 1) 日本語と韓国語の敬語

日本語と韓国語には敬語が存在するが、両言語の敬語の特徴においては類似性も多くあれば相違点も見られる。

まず、日本語の敬語は相手の行為や所有物に対して尊敬の意をあらわす尊敬語、話者が自分を下げ、へりくだることによって相手に尊敬の意をあらわす謙讓語、表現を丁寧にし聞き手に対する敬意をあらわす丁寧語など一般的に三分法に分類することができよう。

韓国語の敬語も学説によって異論はあるかもしれないが、基本的には日本語と同じように尊敬語、謙讓語、丁寧語の三つの体系に分けることができる。この三つの敬語の体系の

中で両言語の敬語の最も大きな違いは、尊敬語における絶対敬語と相対敬語の存在である。絶対敬語や相対敬語の違いは日本人の韓国語学習の際、初級レベルで必ず教授する重要な文法項目である。また、日本人学習者は日本語とその使い方に大きな相違点があるため、その使用の背景にある日本と韓国の社会文化的要因、すなわち日本人と韓国人の人の関わり方やその認知方法についての十分な理解がなくては習得が困難な項目でもある。しかし、実際、韓国語の教科書をみると、絶対敬語や相対敬語の存在やその使い方については説明されていても、その文化的背景にまでは説明されていないのが現状である。

そこで、本稿のように敬語の使い方の違いを両言語話者の人間関係における認知構造の違いから捉え、その文化的背景について説明を試みることは韓国語と日本語の言語教育を考える上で重要であろう。

## 2) 日本語の相対敬語と韓国語の絶対敬語

日本語では話題の人物や聞き手が話し手より目上であっても、話し手の側（ウチ）に属していれば、尊敬語や丁寧語を使わない。また、話題の人物が目下の人であっても聞き手側（ソト）に属していれば、その話題の人物に対して尊敬語を使う特徴がある。一方、韓国語では話題の人物や聞き手が話し手の側（ウチ）に属していても、話し手より目上であれば、例え身内であっても、話題の人物や聞き手に対して尊敬語や丁寧語などの敬語を使う。

- ①日本語 A：山田部長はいらっしゃいますか。  
B：山田は只今席を外しております。

韓国語 A：야마다 부장님은 계십니까? (山田部長様はいらっしゃいますか。)  
B：야마다 부장님은 지금 안 계시는데요.  
(山田部長様は只今席を外していらっしゃいますが。)

①の例文のように日本語では、「ソト」の人間であるAに対して「ウチ」の人間を話題にする際には日本では謙譲語を用いるのに対して、韓国語では聞き手が誰であろうと自分にとって目上の人に対しては尊敬語を用いるのである。

- ②日本語 A：お母様は今年でおいくつになりますか。  
B：母は今年60歳になります。

韓国語 A : 어머니는 올해로 연세가 어떻게 되십니까?

(お母様は今年でお年がどのようになられますか。)

B : 어머니는 올해 연세가 60이 되십니다

(お母様は今年お年が60になられます。)

②でみるように、韓国語では話題の人物がごく近い家族であっても尊敬語を使わなければならない。韓国の家庭では基本的に子供が親に対して敬語で話すべきとされており、家の中でも子供は親に対して敬語を使うことが一般的である。もちろん、子供のうちは親に対して敬語をきちんと使わない場合もあるが、成人になると一般的に敬語を使うのである。

③日本語 A : お兄さん、こちらにはいつ帰ってくるの。

B : 7月には帰るよ。

韓国語 A : 형님, 여기에는 언제 오시나요?

(お兄様はこちらにはいつ帰ってこられるのですか。)

B : 7월 달에는 갈께. (7月には帰るよ。)

さらに、韓国ではそれほど年の離れていない兄弟の間では敬語を使わない場合も多いが、③の例文のように、年がある程度離れているような場合は敬語を使うことのほうが多い。特に、兄が結婚するようになると弟は兄への待遇度を上げ、敬語をより多く使うようになる。

また、韓国語では生徒が担任の先生に対して「先生、一緒に遊ぼう！」(선생님 같이 놀아!) などと言うことは、たとえ先生が大学卒業したばかりの若い先生であっても言えないのである<sup>5)</sup>。筆者が電車に乗っていた時に、子供が親に対して「もううるさいよ！」(아휴, 시끄러워) と話すのを聴いて驚いたことがあるが、このようなことは韓国では普通の親子関係において起き得ないのである。また、ある知人の大学教授が自分の息子から普段「おまえ」と呼ばれると聴いたことがあるが、韓国ではどんな場面でも目上の人に対して待遇度の低い人称代名詞を用いることは許されないのである。

では、このような日本語と韓国語の敬語使用における違いはどのように説明できるだろうか。これまで見てきた日本人の「ウチ・ソト」、韓国人の「ウリ・ナム」の認識パターンの違いによるものであると考えられる。

日本語の敬語使用は、もちろん相手との上下関係、親疎関係、年齢など様々な要因を考慮した上、最も場面にふさわしい言語表現を選ぶことになるが、これらの選択要因より先に考えなければならないのは、相手が「ウチ」のグループの人間か又は「ソト」のグループ

5) 任榮哲・井出理咲子 (2004) 『箸とチョッカラク』、122ページを参照。

プの人間であるかの「ウチ、ソト」の認知である。相手が「ソト」の人間関係の人には敬語を、「ウチ」の人には敬語を使わないのが敬語使用におけるわきまえである。

これに対して韓国人には「ウチ・ソト」の意識はなく、自己が「ウリ」の人間関係の中で話題の人物や聞き手とどのような関係にあるのかを考え、その場に最も適切な表現を選んで使用することになる。韓国語の敬語使用の要因として最も重要なのは年齢である。韓国語では、日本語の「ウチ・ソト」をあわせた層が「ウリ」であり、「ウリ」の中で自己対相手（話題の人物や聞き手）の関係性において場面に最もふさわしいと考えられる言語選択をしているのである。これらの関係性を捉える認知構造の違いにより、日本人は自己と相手の関係を「ウチ・ソト」の概念で相対的とらえ敬語を使い分けているのに対して、韓国人は「ウリ」の中で自己と相手の関係で考えなければならない言語選択の諸要因、中でも年齢や上下関係のような絶対的要因に従って言語選択をしているのである。

## 6. おわりに

これまで日本人と韓国人の行動パターンのプロトタイプとも言える「ウチ・ソト・ヨソ」と「ウリ・ナム」の認知構造の特徴について比較分析した。日本では自己を取り巻く人間関係として、「ウチ」、「ソト」、「ヨソ」の三つの層があるのに対して、韓国では「ウリ」、「ナム」の二つの層があることが分かった。

日本の「ウチ」の人間は家族や自分の所属している会社や組織、グループの人のようにごく親しい内輪の人々であるのに対して、「ソト」の人間はあまり親しくはないが自己や「ウチ」の人々と関連のある人である。さらに、「ヨソ」の人間は自己や「ウチ」とは関わりのない他人のことを意味する。これに対して、韓国では「ウリ」と「ナム」の二つの人間層があり、「ウリ」は日本の「ウチ」と「ソト」の両方の人間層を含む様々な共同体で成り立っているものである。「ナム」は日本の「ヨソ」の層と同じく、通常自己とは関係のない他人の層である。

また、日本で自己は「ウチ」のグループの一員として考えられ自己という個人より「ウチ」というグループの中で自己を常に意識することが優先されるのに対して、韓国の自己は「ウリ」という広い共同体に属していながらも、個人として独立した存在として認知し、行動するという点において自己の捉え方にも違いが見られる。

「ヨソ」に関しては日韓とも非常に類似している特徴を持つのだが、日本の場合は「ヨソ」が「世間」として自己や「ウチ」、「ソト」の管理者としての監視役をすることがあるという点においては違いが見られる。

さらに、各層の幅を考えたときに、韓国の「ウリ」は日本の「ウチ」と「ソト」をほぼ合わせた広い層で、「ウリ」と「ナム」の間の境界はさほど強くなく、「ナム」と「ウリ」の間で相互移動が可能な流動的な人間関係として捉えることができる。

これらの日韓の認知構造の違いが、言語使用、特に敬語使用に影響を与えることが分かった。日本語と韓国語の敬語表現の最も特記すべき特徴の一つであるにもかかわらず、比較文化的視点からその説明がされてこなかった相対敬語と絶対敬語は「ウチ・ソト・ヨソ」と「ウリ・ナム」の認知カテゴリーからその相違点について説明を試みることができる。

日本語の場合は「ウチ・ソト」と「ヨソ」の関係性が敬語表現を選択する際の一次的な文化的要因であるため、相手によって相対的に表現の選択を行う相対敬語になっているのである。一方、韓国語の場合は、日本語のような「ウチ・ソト」の感覚はなく、言語行動を行う相手は自己と同様、「ウリ」の共同体の中に属している人間として、年齢や上下関係などを考慮し対人コミュニケーションを行うのである。日本のような「ウチ、ソト」のグループ帰属意識ではなく、「私」という自己と相手との具体的な関係性が認知され、言語表現が定まってくるのである。つまり、韓国語の敬語は「ウリ・ナム」の認知カテゴリーの中で、年齢などの絶対的な要因によって敬語表現が使われるのである。

以上、日韓の文化的認知カテゴリーについて考察を行い、そのカテゴリーに基づいて、両言語の敬語表現の特徴について説明を試みた本研究は、言語教育における文化教育の重要性が注目されている日本語教育や韓国語教育の分野において貢献できる一つのアプローチであると考えられる。しかし、実際の言語データを収集分析し、これらの認知カテゴリーがどのように関わっているのかについて、より実証的な研究を続けていかなければならないのは言うまでもないこれからの課題であろう。

## 参考文献

- 井出祥子他 (1990) 『日本人とアメリカ人の敬語行動』 南雲堂  
 井出祥子 (1992) 「日本人のウチ・ソト認識とわきまへの言語使用」『月刊言語』 21巻12号  
 井出祥子 (2006) 『わきまへの語用論』 大修館書店  
 任榮哲・井出里咲子 (2004) 『箸とチョッカラク』 大修館書店  
 小倉紀藏 (1998) 『韓国は一個の哲学である』 講談社  
 加地伸行 (2000) 『儒教とは何か』 中公新書  
 小針進 (1999) 『韓国と韓国人 隣人たちのほんとうの話』 平凡社  
 三宅和子 (1994) 「日本人の言語行動パターン—ウチ・ソト・ヨソ意識—」『日本語教育論集』 9号、筑波大学留学生教育センター  
 森下喜一・池景来 (1989) 『日本語と韓国語の敬語』 白帝社  
 森下喜一 (2010) 「韓国社会の基本的人間関係「ウリ」」『世界平和研究』 186号  
 韓美卿・梅田博之 (2009) 『韓国語の敬語入門』 大修館書店  
 平林周祐・浜由美子 (1988) 『外国人のための日本語例文・問題シリーズ10 敬語』 荒竹出版  
 油谷幸利 (2005) 『日韓対照言語学入門』 白帝社  
 국립국어연구원 (2008) 『표준국어대사전』 국립국어연구원  
 최길시 (1998) 『외국인을 위한 한국어 교육의 실제』 태학사

- Bachnik, J (1990) "Being in the group: spatio-temporal 'place' in Japanese social organization." In Rethinking Japan: Social Sciences, Ideology and Thought. Boscaro, Gatto and Raveri (eds.) New York: St. Martin's Press.
- Chan Sup Chang and Nahn Joo Chang (1994) THE KOREAN MANAGEMENT SYSTEM Cultural, Political, Economic Foundations, Quorum Books Westport, Connecticut. London
- Kumon, J (1980). Referred in T. Kusayanagi. Nani Hankukinkwan (My Perceptions of the Koreans). The Dong-A Daily News.

## 일본인과 한국인의 언어행동에 있어서의 「우치(ウチ)/소토(ソト)/요소(ヨソ)」와 「우리/남」

— 경어행동을 예로 —

### 엄 정 미

본 연구는 일본인과 한국인의 인간관계나 언어행동을 지배하는 사회문화적 특징을 생각할 때 필요한 인지구조의 틀에 대해 비교분석하고 이러한 인지구조의 틀이 언어행동에 있어서 어떻게 나타나는지 경어행동에 대한 분석을 시도한다.

우선, 일본어에 있어서는 기존의 연구 성과에 따라 「우치(ウチ)/소토(ソト)/요소(ヨソ)」에 대해 고찰하고, 일본어와 비교 대상이 될 수 있는 한국어의 「우리/남」의 인지 카테고리틀 제시한다.

일본어의 「우치(ウチ)/소토(ソト)」는 가까운 가족이나 또는 아주 친한 조직이나 그룹 안의 사람들의 관계를 「우치(ウチ)」, 그외의 별로 친분은 없으나 「自己(나)」와 관계가 있는 관계를 「소토(ソト)」의 관계로 규정하고 그 외의 관련이 없는 타인은 「요소(ヨソ)」의 인간 관계로 인지한다.

일본인은 「자기」를 「우치(ウチ)」의 관계에 있는 사람들과 동일시 해, 가족과 같은 「우치(ウチ)」의 관계에 있는 부모형제에 대해서 어떠한 경우에도 경어를 사용하지 않는다. 그뿐만아니라 화제의 인물이 「소토(ソト)」의 인간 관계에 있는 청자나 화자보다 연령면이나 사회적 지위가 높은 경우에도, 회사 상사와 같이 화제의 인물이 「우치(ウチ)」의 관계에 있는 사람이라면, 그 상사에 대해서도 존경어를 사용하지 않는다. 이러한 경어 행동은 「自己(나)」와의 관계가 「우치(ウチ)」인지 「소토(ソト)」인지에 따라 상대적으로 언어 표현이 규정된다고 할 수 있겠다.

이에 반해, 한국어의 경우, 인간 관계를 규정하는 문화 인지적 카테고리로서 「우리/남」을 제시한다. 「우리」란 「自己(나)」가 속해 있는 모든 공동체의 구성원으로서 혈연, 지연, 학연이나 다양한 이해 관계나 취미의 모임과 같이 「自己(나)」와 관련이 있는 사람들의 집합체라 할 수 있다. 한국의 「우리」란 일본의 「우치(ウチ)/소토(ソト)」의 양층을 모두 포함하는 개념이라고 할 수 있다. 한국어에서는 「自己(나)」는 일본어에서의 그것보다 독립적으로 존재하므로, 「우리」의 층의 사람들과의 커뮤니케이션에 있어서는 경어행동을 지배하는 가장 큰 요인인 연령, 사회적 지위 등이 관여하므로, 청자가 가족이라 할지라도 존경어를 사용하며, 화제의 인물이 화자보다 연령적으로나 사회적으로 상위자라면 화제의 인물을 언급할 때 청자와의 대면 회화에 있어서도 존경어를 사용해 경의를 표하게 된다. 이러한 경어의 사용을 절대 경어라 한다. 일본어의 「요소(ヨソ)」와 「남」은 「自己(나)」와 관련이 없는 타인을 의미한다.

이와 같이 일본어의 「우치 (ウチ)/소토 (ソト)/요소 (ヨソ)」와 한국어의 「우리/남」은 경어 행동을 비롯한 양국인의 사회 문화적 행동양식을 이해하는 데 중요한 프로그래밍 타입이라 할 수 있겠다.